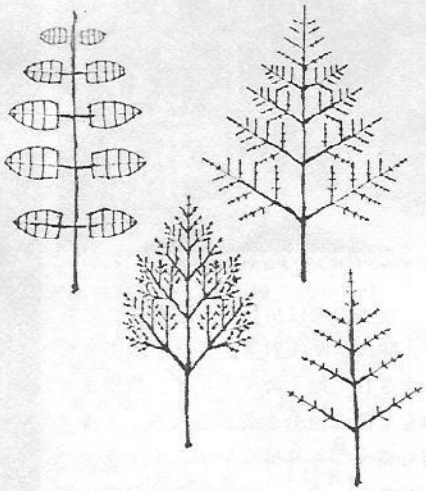
中島興の ビデオソフト学入門③

魔縁羅王像　この王は美出尾のシンボル像で、5つの日を持った美出尾王である。そして、この王は琵琶を奏する音像一体の王で、密教界における映像の王である。以後おみしりおきを。



秋の夕の素き月光あり　是の如きの曼陀羅は、諸仏希有なりと説き給う思惟するに純白を以ってし、輪円九重を成ず　霏霧のなかに住して、一切の熱悩を除く　浄乳は珠鬘と水精を月光との如くにして、普遍して流れ注ぎ、一切処に充満せり

この詩は密教の経典のなかで最もすぐれた経典といわれる「大日経」の水輪曼陀羅の一編である。

地方の読者はご存知と思うが、晴れた秋の夜、時折〝月が傘をかぶる〟という自然現象がある。この詩はその光景を密教の心を通して観察した詩である。

純白無比な秋の夜の月光はすばらしい。その輝く月を見ているとなんだかだんだんと月の光が九重の光輪に見えてくる。その光輪は白い微粒子の雲霧のようであり、そして、その美しさは水面に波立つ水輪や木の年輪のようでもある。その現象はまさしく曼陀羅的なる営みであり、その美しさの一切は普遍性を持ち、流れており、まさしく「人間の心」そのものである。そして、さらに光(熱)と水（冷）という相反する物質がみごとに浄乳しているそのさまはまことに美しく、この世とまったく同一世界なのである。

といった内容であるが、実に観察力にすぐれた詩である。〝月が傘をかぶる〟と月の光がみごとに同心円を描いて、確かに美しい。そのさまはまさに幾何学的であり、図形的であり、また密教的（曼陀羅）である。この現象を地上の現象とオーバーラップさせてみると水輪に拡がる波紋や木の年輪とまったくよく似かよっていることがわかる。よって天と地にはなんらかの共通点があると、この詩は説いているのである。

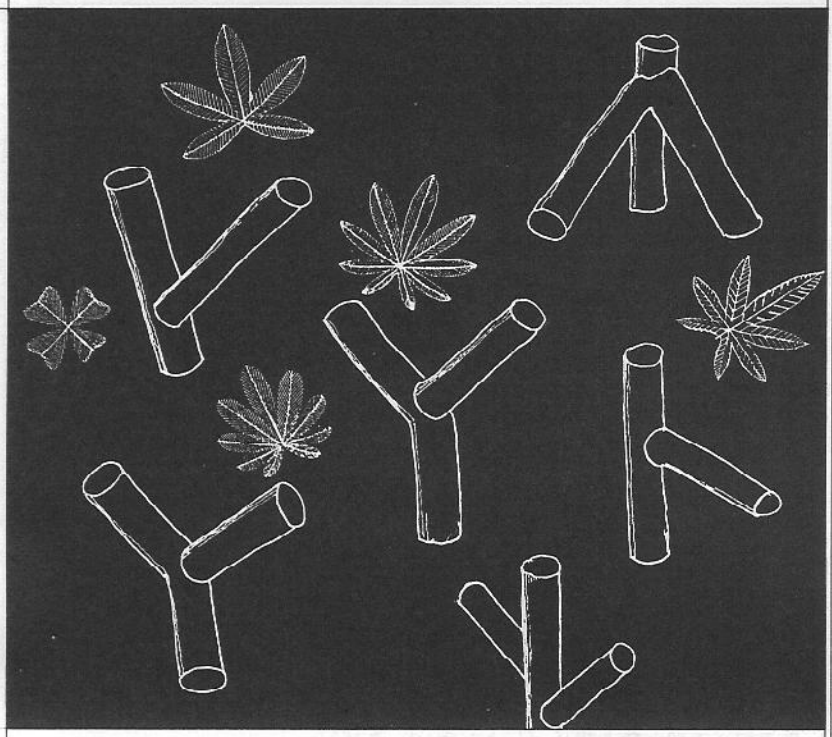
また、この詩に前号で学んだ「五行説」をオーバーラップさせてみても理解しやすくなるだろう。つまり、木・火・土・金・水の五行情報はこの詩を理解するためのシミュレーションワーク（注1）でもあったのだ。

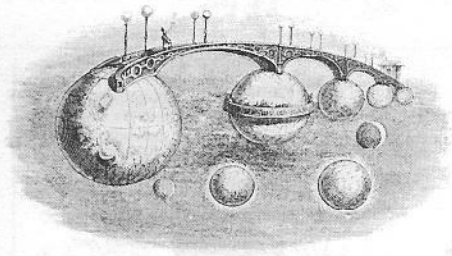
陰陽の木世界

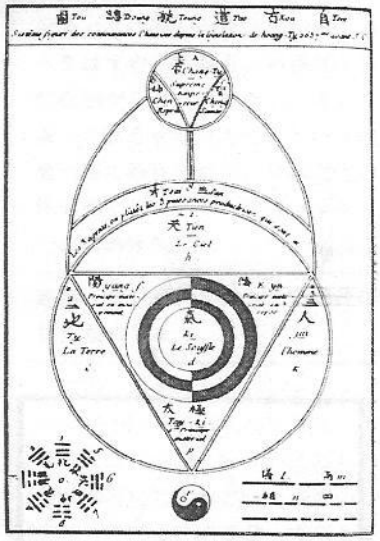
では、今回は木的世界の旅に出発することにしよう。出発にあたり、前号で学んだことを少々復習しながら進むことをお断わりしておく。その進み方も波紋や光輪、年輪といった輪のように、あらゆる事象や創造をサイクル（リング）のなかでとらえるといった方法によってである。

古代中国人は自然を実に細かく観察して、その観察データを人間の精神や性格、宿命、運命、創造開発などにフィードバックさせ、自然と人間の関わり、人間そのものを天空の五大星（木・火・土・金・水）と、地上の五元素の相関関係のなかでとらえた。そして、そこから算命学(儒教）的な方法論で、人間の生き方、物の考え方、精神の持ち方をみごとに開発した。

また、前号でも述べたが、古代中国には「陰陽学」というきわめて古い分類法がある。すべてのものが「陰と陽」に分けられるという思想（発想）である。たとえば男と女、夜と







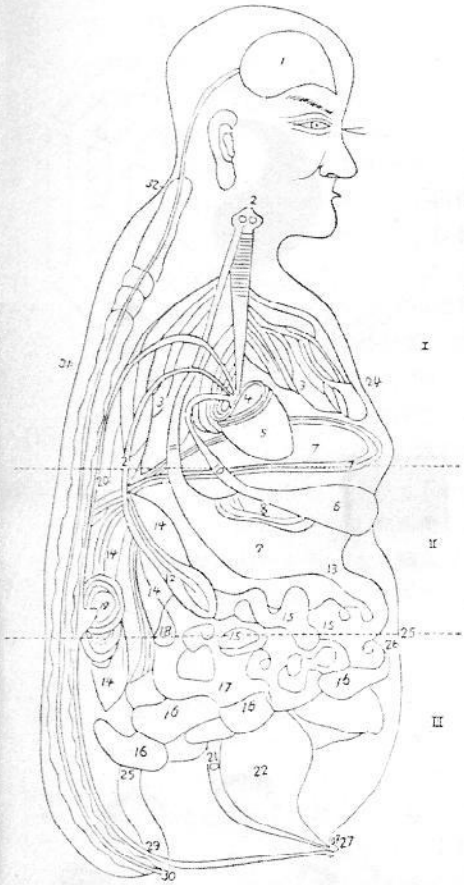
である。つまり、親鸞は「この世」を根の世界であると想定し、この世である根の世界は常に地上の陽の世界（幹・枝・葉）である浄土のためにあると説いたのである。反対に弘法大師は、生きているこの世が一番ハッピーな世界であると説いたのである。

このように同じ仏教家でも陰陽のとり方次第で、宗教の世界観はまったく違ってくる。しかし、大局的に見れば、陰軸発想も陽軸発想も一本の「樹木」における根と幹の循環関係である。根は幹や葉に栄養を送り、幹や葉は空気中の炭酸ガスを吸って根を大きくするというように、総合的循環作用を営んでいるのである。この根・幹・葉といった一体化した、総合的なものの見方で宇宙をとらえることが肝賢である。

つまり、ソフト学流に言えば、総合的にものを観察することは部分を細かく観察することであり、部分を観察することは全体を発見することにつながるのである。しかし、部分をあまり見過ぎると全体が見えなくなってくるので、部分と全体を常にフィードバック（循環）しながら、総合的に世界をシミュレートすることである。それがソフト学的観察法の基点である。

自然の循環サイクルと木的世界

それでは再度、木的世界の話に戻



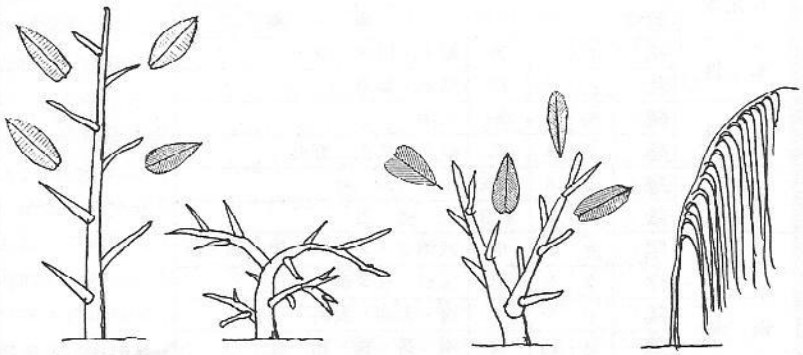
と試みた。その結果、木や草の特質と木的と思われる人間の特質が確かに重なり合うことを発見したのである。

木的人間のソフト学

では、ここでその木的人間（植物人間）がどのような精神構造や創造性、人生観を持っているのか、実際の植物生成のプロセスをモデルに見ていくことにしよう。

図1にあるように、植物は基本的に最初は種（点）から始まる。次に種は芽（線）となり、芽は枝（線）となり、枝は再度小枝（線）に分かれ、やがて葉（面）をつけ、花(体)をつけ、実（体）をつける。そして、さらに実は種を生む。このプロセスは植物形成の基本であり、木的人間の精神構造の基本概念ともいわれている。つまり、木的フィールドを持つ人間は常に「点から線、線から面、面から体、体から点」といった具合に、自己の形態を形づくっていくのである。さらにこの基本形態を「陰陽論」で分けたふたつの木性にあてはめて考えてみよう。「陽」である樹木はご存知の通り、一度土に根をおろしたら、その地で「点（種）から線(芽)、線からさらに線(枝)……」というプロセスをたどって、長い時間（季節）のなかで年輪を重ねていく。この樹木のサイクルの長いプロセスワークに対して、「陰」である草類、とりわけ雑草類は、その基本形態（思考）は樹木と同じでも、そのプロセスの循環はきわめて早く、前述の「点（種）から線（芽）……」といったプロセスを1年でたどってしまう。つまり、その草自身は年輪ももたずに1年で生命を終え、次の点（種）を通し、その生命を転環(伝える）するのである。なんともすさまじい生命力にあふれたサイクルではないだろうか!?

このように木的人間（木星人）の精神、心の構造にはふたつの回路のあることが確認できた。ひとつはロング・サイクルの「陽である木の構造」、もうひとつはショート・サイク



ルの「陰である草の構造」。この両構造は自然を見るとわかるように、お互いに関連し合い、木性特有のプロセスワークをもって展開されているのである。つまり、木星人は単純にみえて、なかなかの構造主義者なのであり、ひとつのシンプルな基本形態をたくみに人間世界へ導入しているのである。

枝を分け、葉を生産し……というように、これらを複雑に組み合わせて、自己の精神状況を常に立体的にみせるという独特の能力を備えているのである。その能力がこれら木(植物)の形態形成のパターンからきていることはいうまでもない。

さて、その組み合わせの得意な木星人である読者諸君!!　木(植物)をよくビデオで観察することだ!!諸君は前述の木的構造、構築法を自身のソフト作りの根底に置き、なおかつそれで現実世界をとらえるべきなのである。

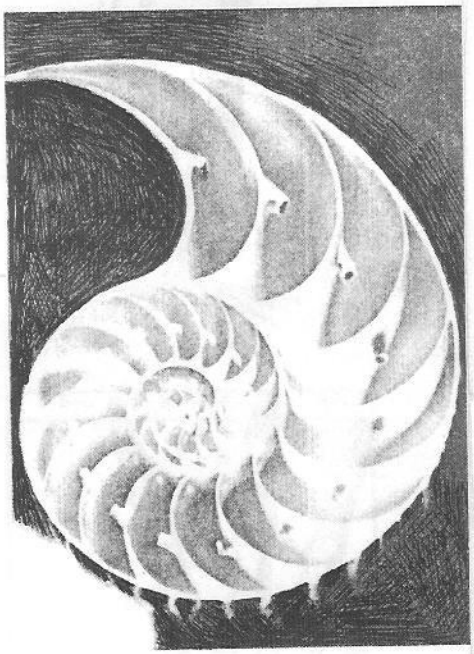
木(植物)の形態・形成パターンを見ればわかるように、木星人には「枝を分ける」つまり、ひとつのものを常に「2枝で見る」という2パターン主義(枝わかれ)がその発想の原点(基盤)にあり、これが木星人のすぐれた点なのである。さらにつけ加えるなら、「陽」の木的人間のその発想法のキーポイントは「巨木動じず!!」である。巨大な樹木は動いたらその構造基盤を失う。よって「陽」の木的人間は自己の年輪を基軸に「静を保つ」ことである。それが「物を見る」ための重要なポイントなのである。つまり、ソフト作りのサイクルを1年(年輪)と定めて制作し続け、50年、100年後の完成、評価を待つべきなのである。いや千年後と見た方が巨木的かもしれない。よって巨木システムは「陰の木(草類・雑草や米、麦など)」に見られる1年でひとつの生命が完結するといった早い時間の循環構造を主軸におくのではなく、時間の流れを長期的にとってソフト学を実践すべきなのである。

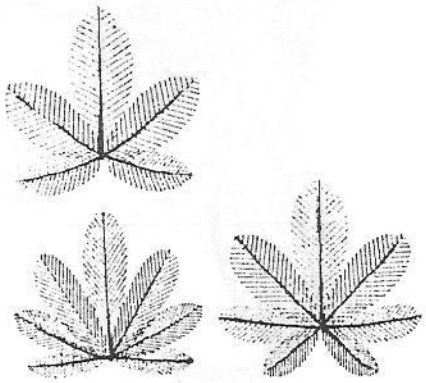
ビデオ箱庭宇宙論

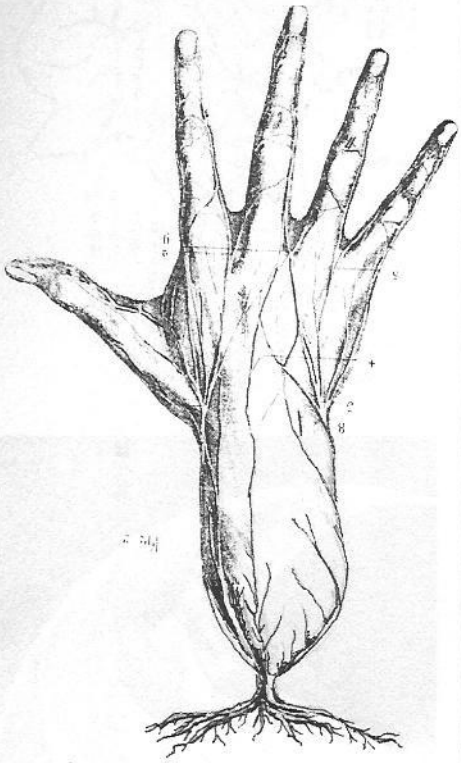
自分を樹木だと思う木的人間は、自分を一度「樹木」にみたて、樹木の眼と時間帯で現実をみることである。それは樹木の「心」でものをとらえるということでもある。一枚の木の葉を「押し葉」にして、その構造をよく観察すると、その葉の「葉脈の構造」が実はその木全体を現わしている。これはつまり、密教でいうところの小さな一枚の「葉っぱ」のなかに木全体(全宇宙)のシステムが存在しているということであり、また同時に小さな木の葉一枚も観察できない人間は大きな宇宙も想像できないという、心の世界観の問題(心の観察法)を葉っぱ一枚に集約して表現してみせたのである。

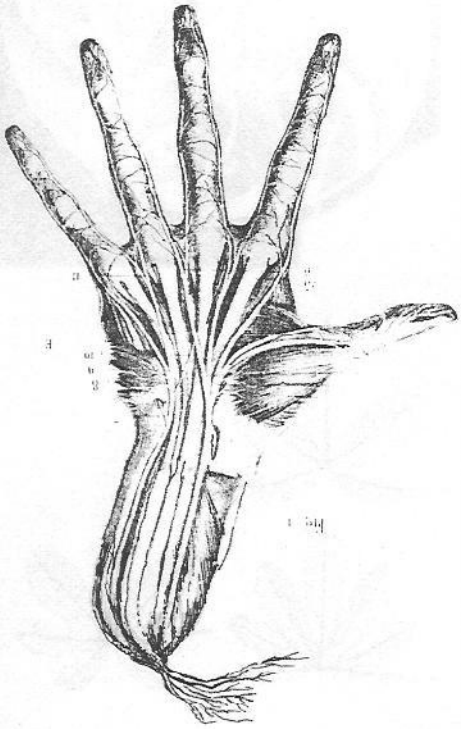
さらに密教の考え方では、地球は宇宙の箱庭であり、宇宙のさまざまな現象が地球に集約されているという。

確かに算命学でいう五行世界であるところの木的世界・火的世界・土









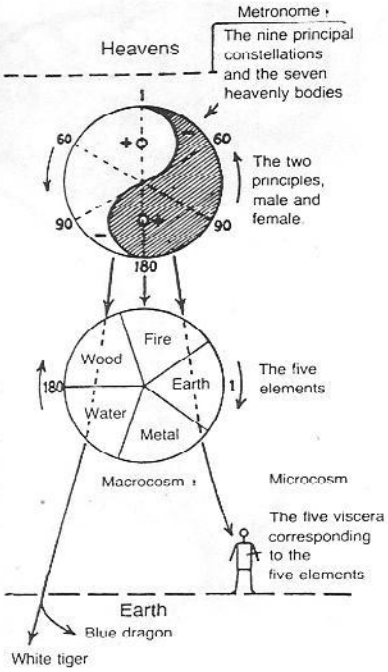
的世界・金的世界・水的世界が地球上には存在している。そして、それらの外部構造と内部構造は深く関連し合って存在しており、人間も同様にこれらの五行（木・火・土・金・水）と密接な関係にある。さらにいうなら、人間の精神構造、性格、知能、運命なども、身体の外部分的なものである五指・五体（頭・手・胸・腹・足）、そして内部のものである五臓「肺・心・脾・肝・腎」のふたつの五の世界と密接に関係しているのだ。この「箱庭宇宙論」を仏教である密教はさらに、人間の毛一本、木の葉一枚にも「仏――宇宙」があると言及している。

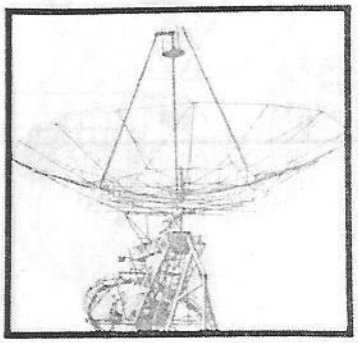
ビデオソフト学をこの箱庭論になぞらえれば、自分の生きている現実世界を細かく観察することが大切であって、ほかの地点にきっと別世界があると思って自分の生きている毎日の日常世界（自分の持ち時間）を深く探求することが、自分自身（私宇宙）を知ることにもなるということである。つまりビデオ箱庭宇宙論は自分の生きている「時間のなかに」自分を発見し集約・圧縮することであり、ビデオは密教や算命学と同様にこの今の時間、この一瞬の時間帯を切り取って生きのびるメディアなのである。自然や時間観察にすぐれている密教や算命学を媒介にしてビデオソフト学のシミュレーションをはからなければならないのである。

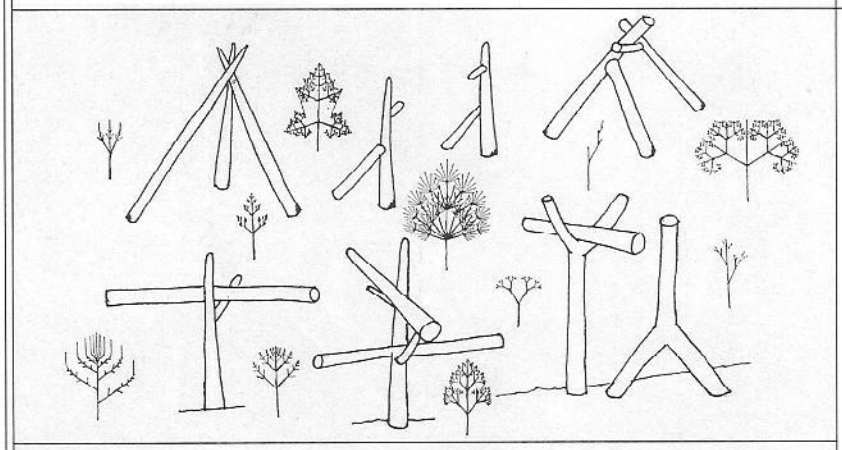
話は木的世界からだいぶそれてきたが、しかし、まんざら無関係でもないのでもう少しシミュレーションの話をしよう。

日本の仏教のなかに親鸞が開いた浄土真宗がある。この浄土教は弘法大師（空海）が日本で開いた真言密教のシミュレーションワークである「現実世界肯定」とは正反対に「この世否定」の考えが強い。浄土真宗では、今われわれが生きているこの世界は「仮の世」であって、その仮の世から離れ、ひたすらこの世でない世界（浄土）にパラダイスを求めることが浄土真宗のシミュレーション的世界であると説いたのだ！　そして、親鸞は人間は死んだのち初めてこの世の苦しみから開放され「往生」するとし、念仏を浄土真宗のシミュレーションワークのキャッチフレーズとして用いたのである。浄土真宗の指導者としての親鸞は「心の観喜」をコンセプトとして強調したのである。つまり、一言でいえば親鸞は死後の世界に待ち構えている「浄土観光旅行」の指定キップを仏教という名を借りて、日本で最初に生み出した浄土旅行会社のトップシミュレーターだったといっても過言ではない。

この世で「あの世への旅」である浄土旅行を売り込むために親鸞は、この世をひと通りくさして、この世に生きることは「あの世（浄土）」に行くための仮りの世の姿だといったのである。この根底には「陰陽論」が媒介役になっているのに気づかなければならない。それはいうまでもなく、この世を「陰」、あの世（浄土）を「陽」とする考え方で、木的世界でいう木の葉の裏と表の世界や地上と地下、地面より下の根の世界を「陰」とし、地上より上の幹・枝・葉の世界を「陽」とするのと同様の考え方







ろう。

木や草は人間が地球上に存在する以前からあり、人間は古代からそれらに親しんできた。特に木の上で生活していた有史以前の人類にとって、木はなくてはならない存在だった。つまり、彼らにとって木的生活は日常生活や生命と深く結びついていたのである。それだけに彼らは木の特長や欠点、木に関する法則などをすべて視覚的(肉体的)に知っており、その情報は私達のものより、たぶんクォリティーの高いものであったにちがいない。その木を知りつくした彼らが「木の文化」を携えて地上に降りたのである。そして、石器時代を迎えるまで延々と「木器時代」を築きあげていったのである。最初のうちは地上と木の上を行ったり来たりしていたが、やがて木の上の文化である木的世界をなんとか地上に持ちこめないかと考え始めたのである。というより自然に木的システムを地上に再現していったのである。その方法も冒頭に述べた1本の枝が2本に分かれるという木的世界特有の「2枝システム」によってであり、このシステムをたくみに組み合わせて、地上に「木の文化(木器時代)」を築き上げていったのである。この木の上で体得した、木についてのすべての情報をシミュレート(モデル化)した木器文化は石器文化にも増して、革命的な文化であったことはいうまでもない。

たとえば3本の木を組み合わせて三角形の住居を作る方法は木器時代の人間の発想であり、床を高くする校倉作りなども木の上に長く住んでいたことの名残りである。

そもそも彼らが木々の間や木の上に住居を作り、〝空中〟生活をしていたのは地上は危険であるという恐怖心からなのであるが、その彼らが地上に降りた第一の理由は風や雨が降ると「木の実」が落下するという現象のせいであり、地上にいればその実を楽に拾って食べられるという革命的（人間的）なる発想が湧き上がったからなのである。

こうやって人類の祖先達は横着な精神をたずさえて、「地上へ地上へ」と降りてきたのである。そして、実のなる木の下に三角錘の住居を築き、

昼、表と裏、プラスとマイナス、ネガとポジ、内と外、内面と外面。さらに昼を陽、夜を陰、男を陽、女を陰とする分類法である。この2分割の分類法は中国生まれだけあって、かなり強引で感覚的でしかも主観的である。

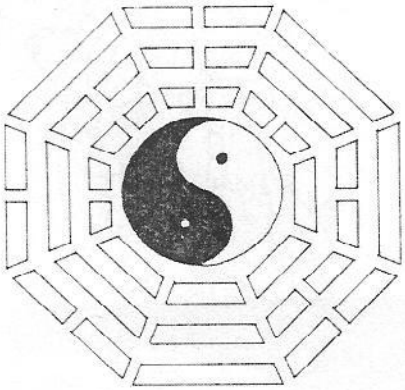
しかし、なんとも説明しにくい摩訶不思議なこの陰と陽の世界は、不思議と私達東洋人の生活や精神の奥深くに内在し、血的なるものとして残っているようである。つまり、それはいまだに私達のものの見方や人間のとらえ方、自然や宇宙（空間）のとらえ方に意識的、無意識的とにかかわらず微妙に反映しているのである。それはとりもなおさず、東洋思想がその発想において、この陰陽分類法から出発しているからである。

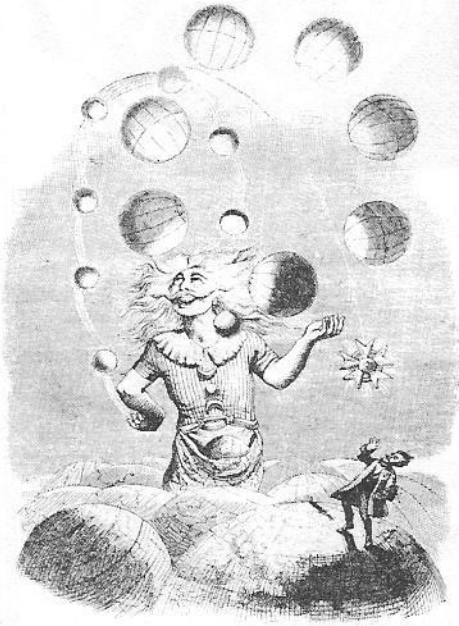
前号の五行分類表にも書いたが、古代中国人は分類が大好きであり、自然のあらゆる事象を五行（木・火・土・金・水）説に分類した。さらにこの五行説にそれ以前からある陰陽学を適用した。天を陽、地を陰と大きく2分割し、よって天空の五大星を陽木星、陽火星、陽土星、陽金星、陽水星とし、地上の五元素を陰木星、陰火星、陰土星、陰金星、陰水星といった具合に10パターンに分類したのである。当時としてはそのような分類法は、きわめて革命的なことであった。5つの世界観が一挙に10世界に広がったのだから、陰陽論は現代におけるボイジャー宇宙船のような存在だったわけである。

さらに古代中国人はこの10の世界（10パターン）の認識論、分類法を証明するために、「陰陽のメガネ」をかけて現実の木的世界を眺めてみた。するとどうだろう。前号の五行分類表にある通り、地上の木性には平原や山裾にドッカリと根をはやし、そびえたつ樹木類と、野草や雑草、米、麦といった草類のふたつに分類されたのである。

そこで、太陽の光をいつもいっぱいに受けてたつ樹木類を「陽」と定めた。「陰」はもちろん地面スレスレに生えている草科の類である。つまり、ふたつに分類できるこの木的世界を「陰陽の木世界」と名づけたのである。

そして、次にこれら木的世界の陰陽2チャンネルを人間の精神構造にあてはめ（シミュレート）てみよう





五元素	五行				
	陰陽	十干		12支	事象
木性	陽＋	甲（コウ）	1	寅	樹木・巨木・林
	陰－	乙（オツ）	2	卯	草木・雑草
火性	陽＋	丙（ヘイ）	3	午	太陽
	陰－	丁（テイ）	4	乙	灯火・焚火・野火
土性	陽＋	戊（ボ）	5	辰戌	山岳・山・峰
	陰－	己（キ）	6	未丑	田・園・道
金性	陽＋	庚（コウ）	7	申	鉄鋼金・刃・剣・金・銀・銅
	陰－	辛（シン）	8	酉	宝石・貴金属・石
水性	陽＋	壬（ジン）	9	子	海・大湖・大河
	陰－	癸（キ）	10	亥	雨・露・霧・霜・雪

陰陽五行説